

ヤコービとシェリングの交錯

——スピノザ汎神論の復活とロマン主義の発酵——

伊坂青司

ヤコービ (Friedrich Heinrich Jacobi, 1743-1819) とシェリング (Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, 1775-1854) は、一八世紀末ドイツのロマン主義発酵の時代にあつて、前者は「信の哲学」によつてロマン主義的感情を發揚し、また後者は「自然哲学」によつてロマン主義的自然觀に理論的枠組みを与えたのだつた。両者はともにドイツ初期ロマン主義を先導しながら、しかしそこには哲学思想の根本的な違いを認めることができる。その相違は、神の存在についての見方、とりわけスピノザ汎神論への評価をめぐつて顕著に現れた。ヤコービは無限実体としてのスピノザの神を批判することによつて個人の感情に神との出会いを求め、それに対してシェリングは、自らを「スピノザ主義者」と称して汎神論に与みした。その後、両者の相違は解消するどころか、ミュンヒェンでの直接対決となつて炸裂するのである。

この小論では、スピノザ汎神論への評価をめぐつて露呈したヤコービとシェリングの差異を、両者の哲学的立場から説き起こし、神の存在性格をめぐるミュンヒェンでの論争のうちに解明したい。

それを通して、神觀念をめぐるロマン主義の時代の思想状況を垣間みることにならう。

一 汎神論争とヤコービ

汎神論争とその波紋

一八世紀後半のドイツは、神觀念の揺らぎの時代であつたといつてもよい。既成のキリスト教正統教義に対抗して、啓蒙思想の導入による理神論、プロテスタント神学の殻を食い破つて出てきた敬虔主義、そして忘却の淵から復活してきたスピノザ汎神論など、さまざまな神觀念の系譜が入り乱れていた。そのなかでも若い知識人のなかに浸透していったのが敬虔主義とスピノザの汎神論である。これらの潮流が一八世紀末ドイツに瀾漫しつゝあつたロマン主義的傾向と結びつきながら、神觀念をめぐる解釈の違いとして顕在化してくる。

ここでまず最初に、スピノザ汎神論をめぐる論争（汎神論

争) について、簡単な経緯とその中で浮かび上がった問題をみておこう。この論争の火付け役になったのは、ヤコービである。彼は晩年のレッシング (G. E. Lessing 一七二九—八二) との対話で、レッシングが秘かにスピノザに共感を寄せていることを知った。世間でも一般に理神論者として認められていたレッシングが自ら「スピノザ主義」を標榜したことは、時代に先駆けてスピノザ思想を研究し汎神論に批判的なスタンスを固めてきたヤコービにとっては、驚き以上のものがあつた。

レッシングの死後、彼の友人で啓蒙主義者の M・メンデルスゾーンがレッシング追悼の出版計画を公表したのを機に、ヤコービはメンデルスゾーンに私信を送り、レッシング自身がスピノザ主義者であることを告白した事実を明かした。これに対してメンデルスゾーンが異を唱え、ヤコービとの間で書簡が交わされることになったのであるが、ヤコービはこの往復書簡を一七八五年に無断で出版してしまい (『スピノザの学説に関する M・メンデルスゾーン氏宛の書簡 [F. H. Jacobi: *Über die Lehre des Spinoza in Briefen an den Herrn Moses Mendelssohn*]'、以下「スピノザに関する書簡」と略記)、ここに一七八〇年代後半に世に言う「汎神論論争」が起つたのである。

ところでレッシングは死の一〇年ほど前から、「自由の精神」を掲げてルター派教会の神学者ゲーツェ (J. M. Geese) を相手に宗教論争を挑み、反正統派の急先鋒として耳目を集めていた。その宗教的立場は、精神の「自由」と「理性」を貫こうとする点で、メンデルスゾーンのそれと共通する啓蒙主義の立場である。しかし同時に、

信仰を個人の「良心」に基づかせようとする点では、ヤコービに通じる敬虔主義的な傾向をもち込んでいた。だからこそヤコービからすれば、他ならぬレッシングが「スピノザ主義」を標榜したことは、黙視することのできない出来事だったのである。

ヤコービは『スピノザに関する書簡』の中で、レッシングが (ヘン・カイ・パーン (一にして全)) という標語でスピノザの神への共感を表明したことを明らかにした。(一にして全) という標語で表明された神は、唯一にして同時に全存在とするスピノザの汎神論的な神、すなわち無限実体としての神に他ならない。このようなレッシングが繰り返し強調した (ヘン・カイ・パーン) という汎神論を象徴する標語は、ヤコービには我慢がならなかったのである。

事態はヤコービとメンデルスゾーンの間の論争だけには止まらなかった。一般に啓蒙主義的な「理神論者」と目されていたレッシングが、「無神論」にも通じかねない異端の「スピノザ主義者」であったとすれば、ヤコービのみならず、当時のドイツの宗教・思想界に衝撃が走ったとしても不思議ではない。ヤコービの往復書簡公表の意図とは裏腹に、事態は思わぬ方向へと展開してゆくことになる。それまで危険思想として忌避され、「死せる犬」として記憶の淵に押しやられていたスピノザ哲学がにわかに注目を集め、スピノザ・ルネサンスともいふべき思想状況が現出したのである。しかも汎神論思想が若い知識人の間に流布していった。スピノザの汎神論思想が若い学生たちの思想形成に少なからぬ影響を及ぼしたことは、この論争の波紋を長引かせる結果になった。後に彼らが皮肉にもヤコービの批判者として現れることを、当の本人は予想だにしていな

かった。

ヤコービの「信の哲学」と汎神論批判

それではヤコービの、スピノザ汎神論にたいする批判点はどこにあったであろうか。彼はスピノザ哲学を次のように理解する。すなわちその汎神論哲学においては、「無限実体」は「永遠に変化しないもの」であって、有限な存在はこの無限実体に包摂される。このように「有限なものは無限なもの内にある」のであるから、有限な存在はすべて永遠な無限実体にあずかって「それぞれの瞬間において、過去も未来も含めて完全な永遠を同じく自分の内に包括する」(W. II-1, 175f.) というのである。

ヤコービはこのような実体理解に基づいて、「個性性」の立場からスピノザの「無限実体」に対して次のような疑念を懐くのである。その疑念とはすなわち、有限な存在が「無限実体」のうちに包摂されてしまうのだとすると、有限な「個性性 (Individualität)」としての《私》の存立はそもそも許されないのではないかという点にある。ヤコービによれば、人間も神も人格として存在するからこそ、人間は神を感情において直接的に感じることができ、また信じることもできるのである。このような《個性性》の見地からすると、無限実体としての神を絶対的に定立するスピノザの汎神論は、次のように批判されなければならない。

「スピノザの神は、あらゆる現実的なものの中の現実性、あらゆる存在するものの中の存在という純粋な原理であり、完全に個性性を欠いていて、そして絶対的に無限です。このような神

の統一性は、区別することのできない同一性に基づいているのです」(W. II-1, 87)。

ヤコービから見ても、スピノザの「神」は有限な個体を飲み込んでしまう絶対的に無限な実体であり、個体はこの無限実体の「様態」として存在するにすぎないのである。このような神の中では、《私》の独立した人格的個性性はその存立の場を許されないと映ってしまふ。ヤコービにとって神は、《私》という個性性の感情のうちにも人格として立ち現れない限り信仰の対象にはならず、スピノザの非人格的で無限な神はそもそも存在しないも同然なのである。

ヤコービはスピノザ汎神論へのこのような批判を通して、独自の「信の哲学 (Glaubensphilosophie)」を形成したのであった。その特徴は、個性性における「信」の感情を哲学的な中心概念に据えることにある。彼の言う《信》とは、「私」の内面的な「感情」において神を直接的に感じるといふ信仰心に他ならない。ヤコービにとって神は、無限実体としての絶対者などではなくて、《私》という個性性の感情において出会ふことのできる「人格」なのである。「神である汝 (Du)」なしには、人間である我 (Ich) は決して存在しない」(W. II-1, XIII) と言われるように、神は《私》の手の届かない非人格的な超越者ではなくて、一人称によって表現される「人格」として、この世界で直接的に出会い感じることができると存在するのである。こうして、二人称の人格である《汝》が存在して初めて《私》が存在するという関係のなかで、神の根源性が人間意識の内奥で感受されることになる。すなわち神は、私の感情に根源的所与として与えられているのであって、《信》の感情の源泉をなすと

言われるゆえんである。¹⁾

このように「信」を個人の内面的「感情」に基づけるヤコービの発想は、既成の教会を否定し、魂の内奥に神を求める「敬虔主義 (Pietismus)」の流れの中にあるといえよう。この敬虔主義の系譜は、ドイツ・ロマン主義の形成において重要な役割を果たすことになるが、ヤコービの「信の哲学」はその先駆的形態をなすものであった。

二 シェリングと汎神論思想

スピノザ汎神論の受容

ヤコービによって火をつけられた「汎神論論争」は、当時のドイツ思想界に決定的な影響を及ぼすことになる。その一端を、次代の哲学思想を担うことになるテュービンゲン神学校 (シュティフト) の青年知識人たちに見てみよう。

「スピノザに関する書簡」が出版され汎神論論争に火がつけられた四年後には、隣国フランスで「自由」の理念を掲げる革命が勃発し、ドイツにも余波が及んでくる。フランス革命が勃発しようというその前年にテュービンゲン神学校に入学したヘルダーリン、ヘーゲル、そしてその二年後に加わったシェリングらは、新聞やパンフレットを通して伝えられる革命情勢に間近に触れ、革命に共鳴し「自由」の理念を共有したのだった。

しかし彼らは、ライントラント地方における共和主義者 J・ゲレスのように、革命的な政治行動に打って出たわけではなかった。彼ら

の精神は、革命への熱狂一色に染められていたわけではない。それは、遅れたドイツに政治革命をもたらすことを断念したからというよりも、むしろいち早く啓蒙的理性の限界に気づき、より包括的な理念を求めていたことによると理解することもできよう。一八世紀末に向かつて時代は、啓蒙的理性によって先鋭化された分裂、すなわち主観と客観、自由と自然といった二元論的な分離を超え出る原理を求めていたのである。

彼らが神学校の中に読書グループを組織し、プラトンやカントの著作をテキストに討論をしていたのは、決して政治革命の代償行為ともいえないであろう。彼らは啓蒙的理性を越える原理をプラトンの対話篇やカントの道徳律などに求め、思想的に模索していたのである。われわれがここで注目したいのは、次代を担う若い神学徒たちが、「汎神論論争」で名を馳せていたヤコービの著作「スピノザに関する書簡」を輪読テキストの一つに選び、熱い議論を闘わせていたという事実である。彼らがテュービンゲン神学校に入学してきたのは、「汎神論論争」の開始から数年後のことで、その余波はまだまだ生々しい状態にあった。既成のキリスト教教義に飽き足りない若い神学徒たちは、「スピノザに関する書簡」のなかに「ヘン・カイ・パーン (一にして全)」という標語によって表現される汎神論思想を見いだしたのである。スピノザが彼らにとつて希望の星となり、汎神論が神についての新たな原理として受容された。たとえばヘルダーリンが、ヘーゲルの記念帳にスピノザ主義を標榜するレッシングの標語「ヘン・カイ・パーン」を遺している (一七九一年二月十二日付) ことは、そのことを象徴的に示しているであろう。

若い神学徒たちにとって当面する思想闘争の標的は、当時支配的であった既成のキリスト教正統派神学であった。しかし、かといってその限界がすでに見え始めていた啓蒙的理性を、正統派神学に対置することもできなかった。こうした状況の中で彼らは、ヤコービの著作を通して、「危険思想」のレッテルを貼られていたスピノザ哲学に触れ、こうしてスピノザの汎神論に啓蒙的理性の限界を克服する可能性と神についての新たな観念を見いだそうとした。彼らは、ヤコービが火を付けた「汎神論争」からスピノザの神を救い上げたのである。

「スピノザ主義者」としてのシェリング

スピノザの汎神論にとりわけ強く、かつ長期にわたって傾倒したのはシェリングであった。彼は、チュービンゲン神学校卒業後すでに二年間の空白期間を経て、ヘーゲルに宛ててスピノザ哲学への期待を込めて次のように書き送ったのだった。「ところで僕はスピノザの倫理学に取り組んでいる。それはあらゆる哲学の最高原理を樹立するに違いない」(一七九五年一月)⁶。ここには、スピノザ哲学に傾斜するシェリングの思想的方向が表明されている。

スピノザについての評価を慎重に差し控えたヘーゲルの返事を受けて、前の手紙から一ヶ月後、シェリングは改めて同意を求めるかのように、次のように書き送っている。「僕たちにとって神についての正統な概念はもはやないよね。僕の答えはこうなる。僕たちは人格的な存在を越えてもっと先へ行っているということ。それでも僕はスピノザ主義者なんだ!」⁷。シェリングはここで、正統派神学

への批判を確認した上で、ヤコービの人格的な神をも越え、さらに自らスピノザ主義者を標榜するまでに至ったのである。シェリングは、スピノザ汎神論への感染が単なる麻疹のような一時的なものではなかったことを、この手紙によって再確認したのであった。

この時期のシェリングは、『全知識学の基礎』(一七九四年)の著者フィヒテの自我哲学にも感染している。そのことは、同じ手紙の中で次のように語られていることから知ることができる。「僕にとってすべては自我なんだ。……あらゆる哲学の最高の原理は、純粹で絶対的な自我だ。つまりそれは純然たる自我で、未だ客体によって制約されないで、自由によって定立されたかぎりでの自我なんだ」⁸。一方でスピノザの汎神論に傾倒するシェリングと、もう一方でフィヒテに感染して熱っぽく語るシェリングがいる。しかし、スピノザの汎神論にフィヒテの絶対的自我を継ぎ足す無謀な試みが、そう長く続くはずはなかった。

この時期に書かれたシェリングの『哲学原理としての自我について』(Von Ich als Princip der Philosophie, 1795) は、自然哲学期に先立つ彼のフィヒテ哲学との格闘を示している。この中でシェリングは、フィヒテ哲学が根底に据えた「自我の絶対的同一性」を出発点にしながら、この絶対的同一性を「非同ー性」との矛盾において問題にしようとするのである。絶対的同一性に非同ー性が対置されることよって、この同一性そのものが相対化される。こうして絶対的同一性としての「自我」に対して非同ー性としての「非我」が「自然」⁹として捉え返されることよって、「自我のなかに自然を、自然のなかに自我をもたらず」(SW, I/1, 198) ことが、当面する

自らの課題として設定されることになる。このようにシェリングの受容した自我哲学は、そのなかに自我主義の相対化と「自然哲学」への移行というモチーフをすでに胚胎していたといえよう。そしてその移行の背景にわれわれは、スピノザの汎神論、すなわち「神即自然」という理念を見ることができるのである。

シェリングは先の著作から二年後、「自我哲学」の原理を捨てて「自然哲学」へと移行し、自然哲学に関する著作を精力的に刊行することになる。『自然哲学の理念』(Ideen zu einer Philosophie der Natur, 1797)と『世界霊についで』(Von der Weltseele, 1798)は、機械的自然観に有機的な自然把握を大胆に対置し、フィヒテの自我哲学に不満を懐いていたゲーテ(1749-1832)の心を捉えて、シェリングを一七九八年のイエーナ大学招聘へと押し上げた。大学での「自然哲学」講義の傍ら、シェリングはさらに一七九九年に『自然哲学体系の第一構想』(Erster Entwurf zu einem System der Naturphilosophie)と『自然哲学体系構想への序論』(Einleitung zu dem Entwurf eines Systems der Naturphilosophie)を出版して、「自然哲学」の押しも押されぬ主導者になっていたのである。

シェリングはこの『自然哲学体系構想への序論』において、自らの自然哲学の基本的立脚点が「スピノザ主義」にあることを告白したのだった。

「超越論哲学に対立するものとしての自然哲学は、それがもたらばら自然を自立的なものとして立てることによって前者から区別されるのであって、それゆえ自然哲学は最も手短かに、自然学のスピノザ主義として特徴づけることができる」(SW, III, 273)。

シェリングはかつてヘーゲルに吐露した「スピノザ主義」の立場を捨ててはいなかった。それどころか彼は、スピノザの「産産的自然(Natura naturans)」の思想に依拠して、「産出性としての自然をわれわれは主体としての自然と呼ぶ」と述べて、自然に根源的に備わる「無限な産出性」(SW, III, 287)を「自然哲学」の中心的なテーマにしたのである。こうしてシェリングは、スピノザの汎神論(神即自然)を自らの自然哲学に融合させ、「無限な産出性」を客体としての自然をも包括する全体概念とするに至ったのである。

チュービンゲン神学校卒業後離ればなれになっていたシェリングとヘーゲルは、一八〇一年にイエーナで再会を果たすことになった。この時期のシェリングは、「自然哲学」から「同一哲学」へと歩を進め、主観と客観との同一性の根拠を「絶対者」に求めていた。このようなシェリングの「絶対者」の立場にヘーゲルは同調して、『哲批評雑誌』(Kritisches Journal der Philosophie)を舞台にして、フィヒテやヤコービを「主観性の哲学」として論難する痛烈な批判者として登場したのである。スピノザの汎神論に嫌悪を示し主観的な感情を根拠にした「信の哲学」を主張するヤコービが、批判の俎上に祭り上げられたのである。ヘーゲルの急先鋒の批判の背後には、もちろんのことシェリングが控えている。

三 ヤコービとシェリングの対決

「バイエルン学術アカデミー」のヤコービ

さて、シェリングとヤコービが初めて邂逅したのは、ミュンヘンにおいてである。両者はロマン主義を育成するバイエルン政府の文化政策によって当地に集うことになり、後述のフランツ・フォン・バードナー (Franz Xaver von Baader, 1765-1841) からも含めて「ミュンヘン・ロマン主義」ともいべき潮流が形成されることになったのである。

その間の事情を見ておこう。ヤコービが「バイエルン学術アカデミー」(Bayerische Akademie der Wissenschaften) 総長として招聘されたのは一八〇四年、彼六一才のときのことである。時あたかもナポレオンのドイツ侵攻によってミュンヘンもまた激動の時代に入っていたのであるが、バイエルン政府はプロイセンと異なつて、軍事ではなくむしろ文化の力によって「新生バイエルン」を創出し、時代を乗り切ろうとしたのである。そこにはマクシミリアン一世の文化政策があったといわなければならない。一八〇六年にはナポレオンによってバイエルン選帝侯国が王国へ昇格され、マクシミリアン一世治下で「学術アカデミー」が名実ともにバイエルンの中心的な王立文化施設となる。彼は南ドイツの地にロマン主義文化を根付かせる拠点として、この学術アカデミーを位置づけたのである。

かつてドイツ・ロマン主義の露払い役を担ったヤコービが学術アカデミーに招聘されたことは、決して偶然のことではなかった。圧倒的にカトリック勢力の強いバイエルン王国が彼に白羽の矢を立てたことは、彼のロマン主義的傾向と矛盾するものではなく、むしろそこには、バイエルン政府の文化政策が投影されているとみることができよう。

学術アカデミーの充実を図ろうとしたヤコービの理念は、アカデミーの改組拡充を記念して一八〇七年の夏に彼自らが行った講演「学会について——その精神と目的」(Über gelehrte Gesellschaften, ihren Geist und Zweck) に表現されている。その冒頭で彼は、学術アカデミーの研究組織が、「知識を求めらる等しい意欲」に発して「学者の自由意思に基づいた結合」を実現すべきであることを強調している (W. IV, 3)。このような理念は、アカデミーが排他的であることを戒めて広く内外から人材を集め、学者の自由な研究活動を保証することを確認したものであるといえよう。

学術アカデミーの改組によって、有能な人材が国内外からミュンヘンに集められた。哲学の分野では、イギリスで最先端の探鉱技術を身につけて帰郷し自然哲学の著作で重要な地歩を築いていたロマン主義的自然哲学者バードナー¹⁰と並んで、「自然哲学」から「同一哲学」への進展のなかで「芸術哲学」を展開していたシェリングもまた、アカデミー会員として迎え入れられたのである。

「造形芸術アカデミー」のシェリング

シェリングがヴェルツブルクからミュンヘンに移住してきたのは、ヤコービがバイエルン学術アカデミーの総長に就任した二年後の一八〇六年のことである。ヴェルツブルク大学を追われるように後にしてきたシェリングにとって、バイエルン学術アカデミーへの招聘を受けたことは、背に腹は代えられない選択であったに違いない。いまやアカデミー総長の座にあるヤコービは、イエーナでのシェリングの共同者ヘーゲルが厳しく批評した当の相手であったにも

かわらず、学術アカデミーの理念に沿って、この有能な哲学者に会員の席を用意したのである。このときヤコービは、間もなくこの哲学者との間に熾烈な論争が闘わされることになろうとは、予想さえしていなかった。

シェリングにとつては、過去の経緯からしてヤコービが近寄りがたく、あるいはよそよそしい人物として想像されたとしても不思議ではない。しかしミュンヒェンに来て間もなく実際に表敬訪問をしてみると、ヤコービの第一印象は意外にも穏やかな人柄で、彼を好意的に迎え入れたのである。そのときの心境をシェリングは、妻カロリーネに宛てて次のように知らせている。「ヤコービは……親切で愛想のいい人だ。少なくとも最初の面識ではね。なにしろ彼は、僕が最初思い浮かべていたのとは違っている」(一八〇六年五月一日付書簡)。ヤコービの方も、前述の学術アカデミーでの記念講演の原稿をあらかじめシェリングに見せて批評を請うなど、配慮を怠ってはいなかった。しかもヤコービの記念講演の後をうけて、シェリングは同じ学術アカデミーでの公開講演の依頼を受ける。この講演は、ミュンヒェンにおいてシェリングが初めて自らを公にできるチャンスであると同時に、新設の運びになっていた「造形芸術アカデミー」(Akademie der bildenden Kunst)の事務総長への就任がかかったもう一つの重要な意味を帯びていたのである。

シェリングは一八〇七年一月二日のバイエルン国王聖名祝日(Namensfest)に設定されたこの榮譽ある講演を、「造形芸術の自然との関係について」(Über das Verhältnis der bildenden Kunst zu der Natur)と題して行った。国王マクシミリアン一世と学術アカ

デミー総長ヤコービはもちろんのこと、次代の国王ルートヴィヒ王もまた臨席し、バイエルン王国の要人、芸術専門家まで含めて総勢五〇〇名という聴衆を前に講演は行われた。その講演で、「造形芸術の根源的源泉」(S.W. III, 282)の解明が試みられた。批判の対象になったのが、芸術を「自然の模倣」とする平俗な理論と「物質を超えた崇高な美」(S.W. III, 285)を掲げるヴィンケルマンの芸術理論であった。それらに対してシェリングは、むしろ自然の根源的本質、すなわち自然の創造性をこそ芸術の源泉とした。すなわち彼は、自然のうちに「あらゆる物を自己自身から産出し、実際に活動して生み出す神聖にして永遠に創造的な世界の根源力」(S.W. III, 283)を看取しようとする。ここにわれわれは、初期の「自然哲学」の復活と「芸術哲学」との融合のみならず、その背景にスピノザの汎神論を確認することができるのである。

講演はミュンヒェンの街がしばらくこの話題で持ちきりになるほどの成功を取めたという。しかしそれだけでは「造形芸術アカデミー」事務総長の席が確実になつたわけではなかった。それというのも、講演の中心テーマであつたはずの芸術の本質を自然生命のうちに求めるといふ主張が、一部に受け入れられなかつたからである。シェリングは、かつてイエーナ大学への就職の労をとつてくれたゲーターに宛てて次のように訴えている。「私の念頭にありましたのは、知恵を愛好する人々(つまり哲学者)よりも、芸術を愛好し芸術に精通した人々でした。知恵の愛好者にとつては、自然の生命の内に芸術の基礎を求めることは気に入らないことです」¹⁾。シェリングの念頭にある気になる存在は、とりわけヤコービであつたらう。

講演に列席していたヤコービが、芸術の源泉を自然の創造性に求めるシェリングの汎神論的な臭いに耐え難い不快感を感じていたことは、後に明らかになる。

いずれにしてもシェリングは、自らの主張をより広く世間に印象づけるために講演原稿を著書として刊行し、その書評をゲーテに依頼したのであった。「講演は当地で成功を収めました、その成功が外国の重要な評定によって支持されずならば、当地での私の状態を好転させてくれるでしょう。私は、当地で近々開設される予定の造形芸術アカデミーに活動の場がほしいと思っています」¹²とまで、彼はかなり露骨に自らの心情を吐露している。ゲーテは講演について高い評価を与え、実際にシェリングの求めに応じて『イェーナ一般学芸新聞』に掲載する予定で書評を書いたのであるが、その原稿が活字になることはなかった。しかし結果的には、シェリングは翌一八〇八年に新設になった「造形芸術アカデミー」の事務総長に就任するという栄誉を受けることになったのである。

ヤコービのシェリング批判と応酬

シェリングの講演で感じたヤコービの予感は当たっていた。造形芸術アカデミーの事務総長職に就いたシェリングは、一八〇九年から『哲学著作集』を刊行し始め、その第一巻で論文「人間的自由の本質についての哲学的研究」(Philosophische Untersuchungen über das Wesen der menschlichen Freiheit)を書き下ろした。そのなかで彼は、人間の自由意志と必然性、あるいは悪をなす人間と神との関係といった問題について、汎神論の立場を公然と表明して論じた

のである。この論文は、F・シュレーゲルの汎神論にたいする論難に応えて「正しく解された汎神論」を擁護することを直接の動機にしているが、かつて「汎神論論争」の火付け役になったヤコービを意識していることは疑いない。ヤコービはかつて「汎神論論争」において、汎神論的な神を前にしては人間の自由意志など許される余地などありえないと説いていた。これにたいしてシェリングはこの論文において、人間的自由を汎神論と両立させようと試みている。彼によれば、人間の自由は必然性に背を向けたり、反対に必然性に身を委ねることによっては実現されない。むしろ「必然性と自由の矛盾がなければ、哲学ばかりではなく、精神のどんな高次の意欲もみな死にたえてしまう」(SW. III 338) というように、人間精神は必然性と緊張関係のなかでこそ自由を輝かせるというわけである。このような基本的観点から、シェリングは汎神論を宿命論と見なす議論にたいして論駁を試みる。たしかに汎神論は、無限実体としての神のなかでは有限存在が自由ではあり得ないかのように論難されてきた。しかし、人間が「神の外に存在するのではなくて、神の中に存在する」(SW. III 339) のだとすれば、人間の自由もまた神に対立するものではなくて、むしろ神のうちでこそ実現されるはずだということになる。

シェリングは有機体における全体と個体の関係と類比的に、神と人間的自由の関係を論じている。個体は有機的全体の中に生存しているからといって自由でないとはいえないのと同様に、個人が神の中にあるからといってその自由が奪われるわけでは決してない。有機的全体の中でこそ個体は生命を得ているのと類比して言えば、

むしろ個人は「自由なものである限りにおいて神のうちにあり、……不自由なものである限りにおいて必然的に神の外にある」(SW. III. 347)と、いうことになるわけである。このように持ち出された有機体論には、汎神論を背景にした初期の「自然哲学」が影を落としている。

ヤコービとシェリングとの間には、もともと神の存在理解について決定的な相違があった。ヤコービが神を感情という個人の主観的内面性において信仰しようとするのたいして、シェリングはスピノザの汎神論を受容しつつ、自然の無限な創造性のうちに神の存在を看取しようとする。スピノザ主義を拒絶するヤコービにとって、学術アカデミー講演で汎神論を髣髴とさせる自然主義を主張し、あまつさえ論文「人間の自由の本質」において公然と汎神論を擁護するシェリングは、次第に許しがたい存在として映るようになってゆく。両者の間に論争が始まるのは時間の問題であった。

論争の直接の発端は、一八一一年にヤコービの発表した論文「神的事物とその啓示について」(Von den Göttlichen Dingen und ihrer Offenbarung)が、暗にシェリングの自然主義的で汎神論的な神を批判したことであった。ヤコービは「有神論 (Theismus)」の立場から、神の存在性格を次のように特徴づけた。すなわち「神は絶対的に完全なるものである。この神のみが、自己のうちで、そして自己を通して、ただそのみが存在しうる」(SW. III. 274)のだと。このように立てられた絶対的な神は、しかしながら人間から超越したのではなく、「神はわれわれのうちに生きている」(SW. III. 276)というように、人間の感情においてこそ信じられ、それ

だからこそ存在するとされるのである。

このようなヤコービの有神論的立場からすると、シェリングの汎神論が人格神の存在を否定するように映つても不思議ではない。つまりシェリングの自然主義的立場は、神の存在を自然の中に解消し無にしてしまうように見えるのである。「この自然主義者(シェリング)は次のように独断的に主張する。あらゆるものは自然であり、そして自然の外にも自然を超えても、そこには何も存在しないのだと」(SW. III. 386)。こうしてヤコービはシェリングに、神の存在を否定する「無神論 (Atheismus)」のレッテルを貼るのである。

このようなヤコービからの批判に対して、シェリングは翌年には論駁を行つて、逆に彼を窮地に追い込むことになる。論駁は「フリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービ氏の神的事物に関する著作の F. W. J. シェリングからの記念」(F. W. J. Schellings Denkmale der Schrift von den göttlichen Dingen des Herrn Friedrich Heinrich Jacobi)と題した挑発的なパンフレットによってなされた。そのなかでシェリングは、ヤコービから投げつけられた「自然主義」という批判を逆手にとつて、自然主義が「無神論」に通じるものではなくて、むしろ「有神論」につながることを主張する。すなわち自然こそ神の存在にとつての基礎をなすのであつて、汎神論を忌避して自然を排除するヤコービの人格神の方こそ、「有神論」の名に値しないのである。「なぜなら、神の自然にたいする関係のはっきりとした概念がなければ、神そのものの概念も知りえないからである」(SW. III. 68)。シェリングにとつて自然主義こそが、「有神論の基礎であり、有神論に必然的に先行するもの」(SW. III. 69)

なのである。

ヤコービとシェリングの「有神論」をめぐる論争は、結局シェリングに軍配が上がり、ミュンヒェンにおける彼の名声は不動のものになる。それにはたいして、ヤコービの方は自ら仕掛けた論争によって窮地に陥り、一八一三年には学術アカデミー総長の職を辞任する羽目になる。ヤコービがシェリングを学術アカデミーに招聘したこととは、ヤコービ自身の思惑とは異なって、自らの命取りになってしまったのである。

* *

一七八五年に始まった汎神論論争は、ミュンヒェンにおけるヤコービとシェリングとの論争にまで尾を引いていると言わなければならぬ。その論争には、神の存在性格をめぐる、「感情」に根拠をおくヤコービと「自然」に根拠をおくシェリングという対比がくっきりと浮かび上がっている。両者は共にロマン主義の哲学の傾向を有し、そして感情と自然というロマン主義のキーワードを駆使しながら、しかしながらその定位する根拠の違いから神の性格づけにおいて両極へと分岐したのである。

註

引用文に付した略号は次の文献を示す。なお略号の後のローマ数字は巻数を、算用数字はページ数を、また引用文中の「」は筆者

の挿入を表すものとする。

JW: Friedrich Heinrich Jacobi Werke, hrsg. von F. Roth und F. Kopen, Darmstadt, 1980.

SW: Schellings Werke (Nach der Originalausgabe in neuer Anordnung), hrsg. von M. Schröter, München, 1929. (巻数と頁付けはオリジナル版に従う)

(1) ヤコービはレッシングとの間で交わされた会話を次のように生々しく再現している。

レッシング「神性についての正当な概念は、私にとつてはもはや存在しません。私はそれに満足することはできないのです。ヘン・カイ・パーン、私はそれ以外には何も確信が持てません」。

私「それではあなたは、ほとんどスピノザに賛成なんではないですね」。

レッシング「もし私が自分に誰かの名を付けるとすれば、スピノザを置いて他に私は知りません」(JW. IV-1, 54)。

(2) ヤコービはスピノザの汎神論が無神論にも通じかねないことを次のように批判している。「スピノザの体系においては、したがって個体や個別的な物が存在しないのと同様に、神性そのものも存在しません。神性そのものが完璧に必然的な仕方、無限なもの、無限なものから産み出すのです」(JW. IV-2, 101)。

(3) ヤコービの「信」という概念には二つの要素が融合している。その一つは、内面的感情における神への「信仰」という要素で

あり、もう一つは、実在性についての感覚的な「確信」という要素である。この点については、拙稿「有限と無限——あるいはヤコービとヘーゲル」(『ドイツ観念論との対話・第五卷・神と無』ミネルヴァ書房、一九九四年所収)を参照されたい。

(4) K・ハマビヤーは、神を〈我〉にとつての〈汝〉とするヤコービの「信の哲学」を、M・プーバーの神学との関連において考察してゐる。Klaus Hammacher: Die Philosophie Friedrich Henrich Jacobis, München, 1969, S.38ff.

(5) K・ローゼン克蘭ツの報告によると、彼らの読書グループはヤコービの著作として、『スピノザに関する書簡』の他に小説(ローマン)『ヴォルデマール』と『アルヴィル』を採り上げていたという。K・ローゼン克蘭ツ『ヘーゲル伝』(中笠肇訳、みすず書房、一九八三年、五九頁)

(6) Brief von und an Hegel, Bd. I, S.15.

(7) *ibid.*: S.22.

(8) *ibid.*

(9) スピノザの汎神論がシェリングの自然哲学に与えた影響については、次の論文を参照。真田郷史「スピノザとシェリング——力の概念をめぐる」(西川富雄監修『シェリング読本』法政大学出版局、一九九四年所収)

(10) F・バーダーのロマン主義的自然哲学については、拙稿「バーダーの自然哲学——生命エネルギーと自然の三二性構造」(伊坂・長島・松山編著『ドイツ観念論と自然哲学』創風社、一九九四年所収)を参照されたい。

(11) 「ゲーテIIシェリング往復書簡(5)」北沢恒人訳(『モルフ・オロギア』第一七号、八〇頁)

(12) 同八〇頁。

(13) 「有神論論争」と名づけられるこの論争については、次の論文を参照。長島隆「存在と虚無——ヤコービとシェリングの論争」(西川富雄監修、前掲書所収)

(いさか せいし・哲学)